

## 教科書におけるフランス革命論の誤り(2)

——『世界史』山川出版社の場合—— その2

小 林 良 彰

- I ロベスピエールの役割が誤解されている
- II ロベスピエールのもとに公安委員会を強化したのではなかった
- III ロベスピエールの役割の過大評価を批判する
- IV 封建領主権の無償廃止で農民が土地を得た事実はない
- V ロベスピエールだけがダントンを粛清したのではない
- VI ロベスピエール孤立の原因
- VII ロベスピエールは独裁者であったかどうか
- VIII ジロンド派が権力を回復したかのようにいう間違い
- IX 七月革命の原因、結果が正確に書かれていない
- X 付録 この論文に関する教科書の原文

### I ロベスピエールの役割が誤解されている

ジロンド派追放以後のいわゆる恐怖政治について、この教科書はつぎのように書いている。

「政権をにぎったジャコバン派は、ロベスピエールのもとに公安委員会を強化して、きびしい独裁政治をおこなった(恐怖政治)。これは革命を死守しようとする一種の戦時体制で、封建領主権の無償廃止による農民解放をはじめ、強力な物価統制・国民徴兵制の実施・キリスト教の廃止・革命暦の制定など、急進的な諸改革が<sup>1</sup>つぎつぎと断行された」。

1 『世界史』改訂版、村川堅太郎、江上波夫、山本達郎、林健太郎、山川出版社、1986、221ページ。

ここでは、「政権をにぎったジャコバン派」という表現がおかしい。この教科書の著者が、今日の政党政治の状態を念頭において、当時のことを想像し、ジロンド派とジャコバン派があり、ジャコバン派がジロンド派を追放すれば、結果的にジャコバン派の政権ができると思いこんでいるからである。

しかし、前にものべたように<sup>2</sup>、ジロンド派を追放しても、平原派議員約400人がのこり、それにジャコバン派(正確には山岳派)が約150人いたのである。この人数の比率でジャコバン派(山岳派)が単独で政権を握れるはずがない。平原派が山岳派を全面的に支持したときのみ、山岳派は政権をにぎれる。しかし、前にものべたように、平原派は財政の実権を山岳派に渡すことはなかった<sup>3</sup>。したがって、ジャコバン派が独裁政治を行ったという表現は、厳密に言えば正しくない。

「ロベスピエールのもとに公安委員会を強化して、きびしい独裁政治を行った」と書くとき、ロベスピエールの指導権が公安委員会の中に徹底していたかのように思わせる表現になっている。しかし、これもまた、歴史を特定の個人の仕事のせいにする代表的な文章であり、良くても悪くても、ロベスピエールなしでは公安委員会が成り立たなかったかのような表現になっているが、事実がちがう。

教科書の水準をはずれるけれども、論証のために詳しく説明しよう。ジロンド派を追放して以後、公安委員会はまた平原派議員の組織するものであり、山岳派の指導権のもとにはなかった。したがって、ジロンド派追放が、すぐに山岳派(ジャコバン派)の権力になったというわけではなかった。ただし、平原派の公安委員会は、非常手段という意味では多くのことをしなかったので「眠っている委員会」とか、「政策を失った委員会」と

2 拙稿「教科書におけるフランス革命論の誤り」(1)——『詳説世界史』山川出版社の場合——その2(『同志社商学』第38巻4号)145ページ。

3 同論文(1)―3(『同志社商学』第38巻5号)39ページ。

かのあだ名をつけられて批判された。ただし、ロベスピエールは、このときの公安委員会を弁護していた。彼が公安委員会のメンバーでなかったにもかかわらずである。

## II ロベスピエールのもとに公安委員会を 強化したのではなかった

このころフランス軍は敗北を重ね、食料品の価格が暴騰し、買占がはげしくなり、貧民の暴動が起り、これに乗じて過激派の各党派が最高価格制、買占禁止法、買占人の処刑を含む非常手段を要求して、国民公会に圧力をかけた。

そうした状況をふまえて、7月10日公安委員会が改選され、ここで平原派が後退し、またダントンがジロンド派とのつながりに疑いをもたれて落選した。このダントンの落選は重要なことであった。この教科書のような書き方では、ダントンがロベスピエールと並んで恐怖政治を推進し、最後の段階でロベスピエールがダントンを肅清したと理解される。しかし、実際には、ダントンは7月10日の改選で公安委員会から排除され、権力の座から去ったのである。しかもこのとき、まだロベスピエールは公安委員会に入らず、野党指導者の一人としてとどまっていた。改選された公安委員の名前は以下のとおりであった。

バレール、ガスパラン、チュリオ、ランデ、ジャンボン・サンタンドロ、エロー・ド・セシエル、プリュール（マルヌ県出身）、クートン、サン・ジュスト。

このうち山岳派（いわゆるジャコバン派）はランデ、サン・ジュスト、

4 小林良彰『フランス革命の経済構造』千倉書房、昭和47年 349-351, 360ページ。  
『フランス革命史入門』三一書房、1978年、251-255ページ。

クートン、プリュール、ジャンボン・サンタンドレの5人であった。バレールは平原派議員であり、エロー・ド・セジュールは法服貴族（革命前の検事総長）ではじめジロンド派の側につき、のちにジロンド派からはなれたが、ジロンド派追放には同調せず、国民公会議長の立場で、平原派議員を率いて武装した群集の包囲網を突破して脱出しようとしたが失敗した。<sup>5</sup>

6月2日にジロンド派が追放されてから約1カ月は、平原派の公安委員会が続き、7月10日に改選されたとしても、まだ平原派と山岳派の連立という形をとっていた。この9人の公安委員に三人が追加されて、12人になった。7月27日、ロベスピエールが公安委員会に迎えられ、8月14日カルノーとプリュール（コート・ドール県出身）がバレールの紹介で公安委員会に迎えられた。カルノーとプリュール（コート・ドール）はそれぞれ陸軍と軍需産業を担当する公安委員として迎えられたが、これはロベスピエールのしたことではない。バレールがカルノーとプリュールの人選を行ない、国民公会に提案したものであり、<sup>6</sup> その意味では、ロベスピエールのもとの公安委員会を強化したという文章には該当しない。

### Ⅲ ロベスピエールの役割の過大評価を批判する

ところで、内外の情勢はますます絶望的になり、ついに9月5日、過激派の中の最大の勢力エベール派が群集を動員して、国民公会を包囲した。このときは、ロベスピエールはエベール派の方針にたいして反対しながら、エベール派指導者に押し切られた。この群集の圧力によって、反革命容疑者の逮捕、食糧徴発のための「革命軍」の編成といった非常手段を、

5 拙著『フランス革命の経済構造』350ページ。

6 小林良彰『フランス革命経済史研究』ミネルヴァ書房、昭和42年、101ページ、『フランス革命の経済構造』360ページ、『フランス革命史入門』253-255ページ。

国民公会と公安委員会が実施させられた。このときには、平原派議員はほとんど発言せず、山岳派（ジャコバン派）の議員が二つにわかれて、賛否両論をたたかわした。そして、ロベスピエールは、この群集にたいしては抵抗しながら、結局その力に屈服する側にまわったのである。<sup>7</sup>

その翌日、9月6日、二人の議員が公安委員会に入ってきた。彼らは、前日にエベール派を支持して、群集の要求する非常手段を可決させた人物であった。したがって、この二人は、ロベスピエールに敵対しながら、ロベスピエールよりもさらに過激な政策を主張した人物であった。彼らの名前は、ビョー・ヴァレンヌとコロー・デルボワであった。<sup>8</sup>

このとき以来の公安委員会を大公安委員会といい、恐怖政治の推進母体とみなされている。そのメンバーは12人で、以下の名前になる。

バレール、エロー・ド・セジェル、カルノー、ブリュール（コート・ドール県出身）、ランデ、ブリュール（マルヌ県出身）、ジャンボン・サンタン Dre、ロベスピエール、サン・ジュスト、クートン、ビョー・ヴァレンヌ、コロー・デルボワ。

このうち、バレールとエロー・ド・セジェルは平原派にありながら山岳派と協調した者であり、外交を担当した。カルノーは軍隊（陸軍）を指導した。ブリュール（コート・ドール県出身）は軍需産業を担当した。カルノーとブリュール（コート・ドール）この二人は、山岳派ではあったが、ジャコバンクラブに加入していなかった。ランデは食糧を担当したが、ほとんどジャコバンクラブに出席しなかった。ブリュール（マルヌ県）は地方に派遣されてほとんど中央にいなかった。ジャンボン・サンタン Dreは海軍を担当したが、かれも地方によく出かけていた。ロベスピエール、サン・ジュスト、クートンの三人が、いわゆるロベスピエール派であった。<sup>9</sup>

7 拙著『フランス革命の経済構造』365ページ、『フランス革命史入門』258ページ。

8 拙著『フランス革命の経済構造』366ページ、『フランス革命史入門』259ページ。

9 拙著『フランス革命経済史研究』100ページ。

サン・ジュストとクートンは、恐怖政治の前半の時期には、派遣委員として前戦に出ていた。ビョー・ヴァレンヌとコロー・デルポワがエペール派の保護者であった。

このような経過と、このような委員の顔ぶれをみて、なおかつこの教科書のように、ジャコバン派はロベスピエールのもとに公安委員会を強化して、独裁政治をおこなったといえるだろうか。ロベスピエール自身が公安委員会では新入りであり、その後から入ってきた二人の委員は、ロベスピエールに対立して、過激派や群衆の支持を背景にして割り込んできたのであった。ロベスピエールと意見の一致する二人の公安委員は、前戦に出ていって年内には留守がちであった。

外交、軍事、軍需産業、食糧の権限は、ロベスピエールと関係のない委員の手に握られている。そして、それらの行政上の命令は、担当公安委員の署名と、二人の委員の副署で有効になった。副署はお互い気の合うもの同士で署名しあった。したがって、ロベスピエールの意思を素通りして、現実の行政上の命令はどんどん実行されたのである。<sup>10</sup>

それでは、ロベスピエールの恐怖政治における役割は何かといえば、それはジャコバンクラブにおいて、公安委員会の政策を説明し、ジャコバンクラブを公安委員会支持に結びつけ、他の過激派、エペール派の諸党派を押えることであった。

エペール派が、国民公会から平原派を排除せよとか、67人のジロンド派議員を革命裁判所にひき出せと要求する運動を起したときに、ロベスピエールはジャコバンクラブにたいする彼の影響力を行使して、その動きを押えこんだ。そのかぎり、平原派議員はロベスピエールに感謝し、その結果、ロベスピエールの権威は高まり、彼への支持は増大した。<sup>11</sup>

10 同書、101ページ。

11 拙著『フランス革命の経済構造』445-446ページ、『フランス革命史入門』297ページ。

#### IV 封建領主権の無償廃止で農民が土地を得た事実は無い

この教科書もまた、いわゆるジャコバン派の独裁政治の政策の第一に、「封建領主権の無償廃止による農民解放」を書いている。この言葉に、つぎのページの「土地を得た農民……が保守化した」<sup>12</sup>と書いていることを考え合せると、領主権の無償廃止は農民解放につながり、農民解放は土地の無い農民（貧農や小作農）に土地を与えたというように解釈される。

しかし、そのような事実はない。それはすでに以前に証明したとおりである。領主権を無償廃止すると、これに服していた大土地所有者、中農、小土地所有者が、ともに領主権から解放されて近代的土地所有者になった。しかし、その政策は、土地を持たなかった者に土地を与えたというような効果を発揮することがなかった。この点については、以前に詳しく論証した<sup>13</sup>ことである。したがって、この教科書のいうように、土地を得た農民が保守化したという状態が、フランス革命の動向に大きな影響を与えた事実はない。

#### V ロベスピエールだけがダントンを粛清したのではない

この教科書は、ロベスピエールとダントンとの関係をつぎのように書いている。

「そのうえジャコバン派の指導者内部に対立がおこり、ロベスピエールはダントンらの政敵を粛清して独裁を強化したが、まもなく孤立し、1794年

12 『世界史』山川出版社、222ページ。

13 拙著前掲論文(1)ー2、(『同志社商学』第38巻4号、1986年)12ページ。

7月27日(革命暦テルミドール9日)のクーデタによって処刑された<sup>14</sup>。

この文章を読むと、ロベスピエールがダントンを肅清して独裁を強化したとなっている。これを概説書の水準でみるならば問題はない。ほとんどの概説書が、ロベスピエールがダントンを殺したと書いていて、それを延長させて、ロベスピエールが吸血鬼であるかのように、あるいは親友を裏切った冷血漢であるかのように書いている。

しかし、事実をみると、そのような個人間の対立の物語では、ダントンの死を説明することはできない。ロベスピエールがダントンを殺したという表現は、フランス革命がかなりロマン主義的な文学として描かれたときのものであり、その文学的表現が、いつのまにか事実の表現にすりかえられていったのである。

ダントンは、はじめジロンド派と近かった。やがてジロンド派と決裂し、ジロンド派追放以後も公安委員になったが、しばらくして行政権から去り、一議員としてすごしていた。つまり、ダントンは恐怖政治の段階では、権力から遠ざかっていたのである。

ところで、1794年に入ると、とりあえず恐怖政治の効果が発揮されて食糧事情はやや好転し、群集の不満、暴動も退潮に向い、対外的な戦争もかなり有利に展開して、フランスの中に安心感がただよはじめた。

ただし、肉類の欠乏が目だちはじめ、それにもとづく騒乱状態が発生した。極端な意見としては、反革命容疑者を焼肉にして食べればよいという過激派もでてきた。しかし、他方で、こうした非常手段によって、財産と地位をおびやかされる商工業者、銀行家の不満も出はじめた。彼らの中から恐怖政治の早期解除を要求する声が強まった。こうした情勢を背景に、エペール派は国民公会打倒の武装蜂起を呼びかけた。

他方で、ダントン派が、恐怖政治の終結を訴える運動をおこした。ダン

14 『世界史』山川出版社、222ページ。



トン派とエベール派がお互に攻撃し、お互に傷つけ合った。エベール派はダントン派の不正蓄財、汚職、腐敗をあげた。こうして、公安委員会をばさんで、エベール派とダントン派が争い、お互に傷つけ合ったときに、ロベスピエールも公安委員会も、両派にたいして疑いの目をむけはじめたのである。

まずエベール派が、3月2日から3月7日にかけて国民公会全体にたいする反乱を宣言し、武装蜂起を呼びかけた。この運動は国民公会の平原派も山岳派（ジャコバン派）も含めて、もろともに打倒しようというものであり、ロベスピエールも公安委員会全体も打倒すべき目標とされた。そのため、エベール派の保護者であった二人の公安委員ビョー・ヴァレンヌ、コロー・デルボワすらもエベールを批難した。エベール派の反乱は成功せず、3月13日エベールとエベール派の指導者が逮捕され、3月21日から24日にかけて処刑された。

同じ時期に、公安委員会、保安委員会はダントン派にたいする攻撃を準備した。すでに、エベール派が、ダントン派議員の腐敗、汚職、買占、法律違反を摘発してダントンにとって不利な材料を明るみに出していた。つぎに、当時インド会社事件という一大疑獄事件が発生し、これの審理が進むにつれて、ダントン派議員の重要人物が有罪とみられはじめた。このような議員を自派に抱えたダントン個人も、かがやかしい革命家としての名声の裏に、あばかれると困るような不正行為を隠していた。

たとえば、一年半前のチュリルリー宮殿（王宮）の襲撃の頃、彼は宮廷裏取引をしていた。王の妹が、「私達は安全です。ダントンを当にしているから」といったと伝えられている。つまり、ダントンは、群集や義勇兵を名演説でかきたて、大衆運動を煽動しておきながら、裏では宮廷から金をもらい、大衆運動から国王一家を守ってやると約束したことになる。

その後、軍隊を監視するために派遣委員に就任すると、軍の公金を浪費

したと批判され、ジロンド派内閣の法務大臣の時、彼は機密費を私用に流用したと非難されてきた。

公安委員会と保安委員会によると、ダントン派議員が腐敗議員の集合体であり、その頂点にダントンがいるという認識であった。さらに、よほど詳しいフランス革命史でないと書かれていないことであるが、当時外国人銀行家の陰謀という事件があった。外国から来た数人の銀行家が、恐怖政治を終らせるために、ダントン派とエベール派の両派を操縦して、公安委員会と保安委員会の転覆を計ったという事件である。この陰謀の摘発も、ダントン派への批判を強める材料になった。

こうした条件のもとで、3月16日、つまりエベール派逮捕の直後、保安委員会がインド会社事件についての報告書を発表した。この事件に連座するダントン派議員の運命は定まったかのようにみえた。追いつめられたダントン派が最後の反撃を試みて、自派の新聞で、公安委員会全体を正面から批判した。つまり、対決は、公安委員会と保安委員会にたいする、ダントン派議員の対決という図式としてあらわれた。

公安委員会の中では、ビョー・ヴァレンヌがダントン派の逮捕を熱心に主張し、他の公安委員が賛成したがロベスピエールがためらった。このため逮捕令が遅れた。3月30日、ダントン派にたいする逮捕令が出され、4月5日彼らに死刑が宣告された。ビョー・ヴァレンヌがもっとも積極的であったのは、彼がエベール派の保護者であったからである。<sup>15</sup>

このような事実からみると、ロベスピエールがダントンらの政敵を肅清したと書いて、それをロベスピエール個人の行為であるかのようにいう表現は正しくないことがわかるはずである。さらに、ダントンを肅清したから独裁を強化したかという点でも、その因果関係がないのである。なぜな

15 拙著『フランス革命の経済構造』418-423ページ、『フランス革命史入門』277-8, 285-6ページ。

ら、ダントンとダントン派議員は当時権力の中核にいなかった。彼らは、一年前から、すでに腐敗行為を疑われて、権力の中核からは遠ざけられていたのである。公安委員に一人、保安委員に一人、ダントン派議員がいたにすぎない。そこで、ダントン派を粛清してみても、特別に独裁の強化にはつながらなかったのである。

ロベスピエール個人の独裁を問題にするならば、ダントン派の粛清は直接独裁の強化に結びつかなかった。あいかわらず、財政は財政委員会的手中にあり、軍隊はカルノー、食糧はランデ、外交はバレール、軍需工業はブリュール、警察権は保安委員会的手中にあった。また、保安委員会の多数は最後まで反ロベスピエール派であった。これでは、ロベスピエールによる「独裁を強化した」ことはありえない。

## VI ロベスピエール孤立の原因

この教科書では、ロベスピエールが孤立した理由については何ひとつ説明されていない。もちろん、教科書の水準では説明しなくてもよいのであるが、この教科書の文脈を読むと、「ダントンを粛清して独裁を強化した」ことが孤立の原因になっているかのように思われる。しかし、本質はそうではないという意味で、ロベスピエール孤立の正確な原因について書いておかなければならない。

ダントン派を粛清したあとも、公安委員会と保安委員会の権限は不変であった。それぞれの委員会から、一人ずつのダントン派の委員が姿を消しただけであり、他の者の権限については、いままでと同じであった。もし事態がいままで通り進むならば、ロベスピエールの孤立もおこらなかった。したがって、ダントン派の粛清は、ロベスピエールの孤立にはつながらなかったのである。ダントン派粛清については、公安委員会も保安委員

会も一致して協力し、どちらかといえば、ロベスピエール個人がためらったというのが真相である。

それでは、ロベスピエールがなぜ公安委員会の中で孤立し、保安委員会と敵対し、ついには国民公会全体を敵にまわして滅びたかといえば、これは前にも書いたように、ヴァントゥーズ法の実現に向って突き進んだためであった。<sup>16</sup>それは土地の無い貧民に土地を与えるため、反革命容疑者の財産を没収して無料で与え、彼らを小土地所有者にするという法令である。

この教科書が、「農民解放」<sup>17</sup>、「土地を得た農民」<sup>18</sup>と書いてきた政策の効果がもし実現されたならばそうなるだろうと思われるような内容を含んでいた。この教科書では、すでに恐怖政治に入ったときに、土地の無い農民にたいして土地を与えたと書いているが、前にも指摘したように、<sup>19</sup>実際には、まだ土地の無い農民に土地が与えられていなかったのである。そこで、ロベスピエール派が、いよいよ本気で土地の無い農民に土地を与えようとしはじめた。もう一度言うと、この教科書が、恐怖政治ですでに実現されたという改革は、実際にはまだ実現されておらず、ロベスピエール派がそれを実現しようと努力したところで、孤立して殺されてしまった。これが現実の正確な解釈である。

ロベスピエール派がこの政策、「ヴァントゥーズ法」を国民公会に提案したときには、強力な反対には出合わず、むしろ満場一致に近い形の賛成により可決された。その時期は、エベール派とダントン派粛清の直前であった。これは非常に意味のあることであった。議員の大多数は、この法案を真面目に考えたわけではなく、一種の人気取りの政策で、実行されることのない公約と理解していた。ダントン派、エベール派両派を叩くために

16 拙著前掲論文(1)ー2 (『同志社商学』第38巻4号, 1986年) 15ページ。

17 『世界史』山川出版社, 221ページ。

18 同書, 222ページ。

19 拙著, 前掲論文(1)ー2, 12-14ページ。

は、まず両派の大衆的基盤を失なわせておく必要があった。ヴァントゥールズ法を公布することによって、貧民層は国民公会に期待をかけ、ダントン派、エベール派の呼びかけに反応しなくなった。そのすきに、両派の粛清が行われた。<sup>20</sup>

ところが、ロベスピエール派だけは、この法令を真面目に実行しようとした。反革命容疑者を裁くための人民委員会の設立を提案し、可決させ、その具体的組織に着手した。保安委員会の警察行動ではあてにならないというので、公安委員会の中に一般警察局を設立し、これをロベスピエール派の委員で固め、反革命容疑者の逮捕にのりだした。

最後に、一般警察局と人民委員会が汚職議員、腐敗議員の逮捕裁判の権限を行使することを認めよと、国民公会に提案した。ここで、国民公会の平原派議員と山岳派議員の大多数から反撃された。当時の議員の大多数が、なんらかの形で身にやましいところがあったからである。ここにおいて、ロベスピエールが独裁者であるという批判が国民公会の中からも、また公安委員会の多数派からも、さらに保安委員会の多数派からも投げつけられることになり、ロベスピエール派は孤立したのである。こうして、ロベスピエールは最後の<sup>21</sup>一ヶ月間公安委員会に出席しなくなった。

## VII ロベスピエールは独裁者であったかどうか

この段階でのロベスピエールは、本来の意味での独裁者であったろうか。彼は現実の権力を行使してはいない。各種の行政権が他の委員に握られていたからである。その意味では、独裁者ではない。しかし、独裁者と

20 拙著『フランス革命の経済構造』424-433, 439-440ページ、『フランス革命史入門』292-293ページ。

21 拙著『フランス革命経済史研究』116-118ページ、『フランス革命の経済構造』438-447ページ、『フランス革命史入門』293-297ページ。

いわれただけの理由もある。それは、国民公会全体も、あるいは行政権の担当者も反対した政策を、彼の力によって可決させ、その実施に向ってある所まで推進したからである。

ここまでもっていった力の背景は、当時のジャコバンクラブの武装した力である。軍隊のほとんどが前戦に出ていたために、国民公会や公安委員会が、ジャコバンクラブに対抗するための十分な武力を持っていなかったという特殊な事情があった。したがって、カルノーのように、フランス全国の軍隊を統制していた者であっても、自分を守る武力は貧弱であり、他方で、ロベスピエールが強大なジャコバンクラブの武力を背景に持っていたという状況のもとで、反対派はロベスピエールに正面から逆えないという事情があった。そこで反対派は、表面的にはロベスピエールの言うことを聞いておいて、ヴァントゥーズ法の実施については、あれこれと理由をつけて、引き延すことに全力をあげた。<sup>22</sup>

この対決が、テルミドールのクーデタであり、ロベスピエール派とジャコバンクラブが壊滅した。このいきさつは、フランス革命において、土地の無い農民に土地を与えるという政策が、結局は実施されなかったということの意味する。その事実は、同時に、普通えたいの知れない恐怖心を歴史家からもたれているロベスピエールが、実際には、理解不可能な妖怪のようなものではないことを示す。普通の教科書や概説書が、「フランス革命で実現した」と書く改革を、ロベスピエールが実行しようとして、結局孤立して敗北したことになる。こうして、彼が、特別に理解不可能な独裁者であったというのではなくなる。そして、現実のフランス革命は、土地の無い農民に土地を与えることがなかったのである。

22 拙著『フランス革命の経済構造』438-439ページ。

## VIII ジロンド派が権力を回復したかのようにいう間違い

ロベスピエールが敗北した直後の国民公会について、この教科書は奇妙な説明をしている。それはつぎの文章である。

「こうしてジャコバン派が没落すると、国民公会では旧ジロンド派を中心とする穏和な共和主義者が力を回復して秩序再建にのりだし、1795年、制限選挙を復活させた新憲法（共和国第三年憲法）を公布した。ここに国民公会は解散し、二院制の議会と5人の総裁からなる新政府が成立するが<sup>23</sup>」。

ここでは、旧ジロンド派を中心とする穏和な共和主義者が力を回復したと書いている。この文章を読むと、ロベスピエール敗北の直後に、旧ジロンド派が議会（国民公会）の中心になったかのように思われる。これでは読者の頭が混乱するだろう。なぜなら、旧ジロンド派は処刑されて、存在しないはずではないかと思わせるような文章が前にあるからである。それは、同じページの注に、「ジロンド派その他の政敵が多く断頭台におくられた<sup>24</sup>」と書いているからである。

多く断頭台に送られたのであれば、ジロンド派がほとんど存在しないと理解するのが普通である。それがどうして国民公会の中心になりうるのかという、単純な疑問がでてくるはずである。このような文章を高校生に理論として憶えさせようというのは、教科書不信が起っても当然である。

実際はどうかというと、前にも解説したように<sup>25</sup>、ロベスピエール派を排除したあと、国民公会では平原派が力を回復し、山岳派の生き残りを段階的に権力から排除していったのである。さらに、3ヶ月後にジロンド派議

23 『世界史』山川出版社、229ページ。

24 同書、222ページ。

25 拙著、前掲論文(1)―3（『同志社商学』第38巻5号）7-8ページ。

員の国民公会への呼び戻しが決定されて、ジロンド派議員が復帰した。<sup>26</sup>ここで、ジロンド派議員の一部も、権力機関に参加することになったが、指導権は平原派の有力者の手に残った。これに加えて、旧山岳派議員でありながら、いち早く平原派の側に転向して、ロベスピエール攻撃、山岳派攻撃に威力を発揮した議員の一団がいた。

平原派の実力者としてはバラ、カンパセンス、ルーベル、シエースなどがいて、山岳派主流からの転向者としてはタリアン、フーシェ、メルラン・ド・チオンヴィルなどがいて、旧ダントン派残党にはルジャンドルがいて、ジロンド派の生き残りとしてはサラデン、ケレヴェルガンなどがいた。<sup>27</sup>

ジロンド派の生き残りはたしかに復帰したけれども、その後のフランスの政権の主流にはなりえなかった。その意味で、この教科書の文章は、ジロンド派の復帰に重きをおきすぎているが、他方で、ジロンド派の多くが処刑されたかのようにいう矛盾を含んでいる。ジロンド派の多くが処刑されたかという、そうではなく、約 20 名が処刑され、約 90 名が生きのびて復帰し、その他はわからないというのが事実である。これをみても、<sup>28</sup>「多くが断頭台に送られたという」ときの「多く」という表現が適当ではない。まして『詳説世界史』のように「一切の政敵を処刑した」というのはますます正しくない。ジロンド派の少数だけが処刑されたという事実と、テルミドールのクーデタ以後、旧ジロンド派が議会の中心になったわけではないという事実からすると、この教科書の文章は二重の意味でのためを書いているというべきである。

26 拙著『フランス革命の経済構造』458ページ。

27 同書、456, 459-460, 471ページ。

28 同書、344, 458ページ。



## IX 七月革命の原因，結果が正確に書かれていない

七月革命の原因について、「王が議会を解散し、さらに選挙法を改悪して商工業者を政治から占めだそうとするにいたって、パリの民衆は蜂起し、ついに国王を退位させた<sup>29</sup>」と書いたのは正しかった。

しかし、そのまえに、亡命貴族にたいする補償金が七月革命の原因であるかのように書いたことについては、前にも私が書いたように誤りである。

「しかし、つぎのシャルル(チャールズ)10世は、革命中に土地を没収された亡命貴族に多額の補償金をだすなど、露骨な反動政策をとり、自由主義者の敵対をまねいた<sup>30</sup>」。

亡命貴族にたいする補償金が自由主義者の敵対をまねいたというが、自由主義貴族の中にもまたフランス革命中に亡命した者がいて、土地を没収されていたから、彼らの中に多額の補償金を受け取った者がいた。

オルレアン公爵をはじめとする自由主義貴族がそれであり、彼らは、補償金を受取りながら、七月革命の時点では革命の側につき、七月王政を樹立した。したがって、亡命貴族への補償は直接七月革命には結びつかない<sup>31</sup>。

## X 付録 この論文に関係する教科書の原文

政権をにぎったジャコバン派は、ロベスピエールのもとに公安委員会を

29 『世界史』山川出版社、233ページ。

30 同書、233ページ。

31 拙著、前掲論文(1)―4 (『同志社商学』第38巻6号) 10ページ。

強化して、きびしい独裁政治をおこなった(恐怖政治)。これは革命を死守しようとする一種の戦時体制で、封建領主権の無償廃止による農民解放をはじめ、強力な物価統制・国民徴兵制の実施・キリスト教の廃止・革命暦の制定など、急進的な諸改革がつぎつぎと断行された。

しかし、革命裁判所による反革命容疑者のあいつぐ断罪と処刑は人心に不安をあたえ、経済統制の成果もあがらず、また土地をえた農民や自由をもとめる商工業者が保守化したことなどから、ジャコバン独裁への不満がしだいに強まった。そのうえジャコバン派の指導者内部に対立がおこり、ロベスピエールはダントンの政敵を粛清して独裁を強化したが、まもなく孤立し、1794年7月27日(革命暦テルミドール9日)のクーデタによって処刑された。

総裁政府とその崩壊 こうしてジャコバン派が没落すると、国民公会では旧ジロンド派を中心とする穏和な共和主義者が力を回復して秩序再建にのりだし、1795年、制限選挙を復活させた新憲法(共和国第三年憲法)を公布した。ここに国民公会は解散し、二院制の議会と5人の総裁からなる新政府が成立するが、この総裁政府は王党派とバブーフらジャコバン派残党とによる左右からの攻撃をうけ、経済の危機も克服されなかったため、政局は大いに混乱した。

このような状況下で、社会秩序を安定させる強力な指導者への期待が高まったとき、コルシカ島出身の軍人ナポレオン・ボナパルトが政界に登場してきた。彼は、総裁政府のもとに、イタリア遠征軍の司令官として頭角をあらわし、1797年オーストリアに大勝して名声を高め、また98年には敵対国イギリスをインドから切り離すためエジプトに遠征した。

しかし翌年、イギリスがロシア・オーストリアと第2回対仏大同盟をむすび、フランス国境をおびやかすと、彼は独断でいそぎ帰国し、1799年11月9日(革命暦ブリュメール18日)のクーデタで総裁政府をたおした。か

わって3人の統領と四院制の立法府からなる統領政府が組織されたが、実権はみずから第一統領の座についたナポレオンがにぎったから、統領政府は事実上彼の独裁機関であった。

七月革命 フランスでは、ナポレオンの没落とともに復位したブルボン朝のルイ18世が憲章(1814年)を制定し、立憲王政をしいた。しかし、つぎのシャルル(チャールズ)10世は、革命中に土地を没収された亡命貴族に多額の補償金をだすなど、露骨な反動政策をとり、自由主義者の敵対をまねいた。

1830年7月、王が議会を解散し、さらに選挙法を改悪して商工業者を政治からしめだそうとするにいたって、パリの民衆は蜂起し、ついに国王を退位させた。これを七月革命とよぶ。シャルル10世は逃亡し、自由主義者はオルレアン家のルイ=フィリップを王にむかえたので、七月王政がはじ<sup>32</sup>まった。

---

32 『世界史』山川出版社, 221-223, 233ページ。